

第5章 遺構の考察

1 遺跡の構成

2次にわたる京都大学病院構内の発掘調査によって出土した大量の遺物について、各遺構から出土した良好な一括資料を中心に、遺物整理を行ない、型式学的な検討を加えた成果を前章でまとめた。その結果、ある程度まとまった資料を出土した遺構に関しては、遺物の編年を前提として、その消長時期の検討が可能となった。出土遺物からみた遺構年代観を表20に示す。

遺構の種類としては、溝(SD)、井戸(SE)、土坑(SK)など遺物を多く出土し、表中に掲載することができたもののほかに、建物(SB)、柵(SA)およびその他(SX)がある。

溝・井戸からの出土遺物は種類に富むのに対して、土坑(土器溜)では土師器が大多数を占めることが多い。また、土器溜のように遺物が一括して投棄された遺構や、溝SD11のように時期の異なる数層の埋土を持ち、長期にわたって存続した遺構もある。そのうち溝の年代観について、遺物のうち最も新しい時期のまとまった資料は、その廃棄、埋没の年代をほぼ示すものと考えられるが、それより遡るとみられる遺物をどう扱うかには問題が残る。より古い時期の資料はその遺構の存続年代を反映するものとも考えられる。しかし、遺構の年代の上限を遺物に求めるのは危険であり、ここでは遺跡全体の構成やその変遷を

表20 出土遺物からみた遺構の年代

1100			1200			1300			1400			1500		
平安京Ⅲ期			平安京Ⅳ期			中世京都Ⅰ期			中世京都Ⅱ期			中世京都Ⅲ期		
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新
		SE 25	SE 22	SE 26	SE 18下	SE 12	SE 08	SE 15	SE 03					
			SE 40	SE 29		SE 18上	SE 19		SK 03	SK 04	SK 10			
				SE 30										
			SK 09				SK 02							
			SK 12											
					SD 18	SD 11下	SD 11中	SD 11上	SD 08	SK 08				SD 23上
														SD 24
			SD 10		SD 13			SD 06		SD 05				
					SD 23下			SD 03			SD 04			
					SD 12			SD 01						
					SD 09									

辿る中で検討を加え、無理のないところを採ることにした。

このようにして、各遺構を編年的に整理してみると、それぞれの時期に応じた遺構の配置を想定することが可能となる。一方、前章第4節で考案したように、遺物の総量の時期別変化をみると、平安京Ⅲ期新段階から中世京都Ⅱ期新段階までの間に、ほぼ3度の増減（ピーク）を認めることができ、これに中世京都Ⅲ期と近世京都Ⅲ期を加えて、本遺跡の形成過程を5期に区分して把握できる可能性がある。ここでは、それぞれの時期における遺構の配置を復元的に整理してみた。

（1）第1期（11世紀末～12世紀前半，図23）

平安京Ⅲ期新段階にはじまり、Ⅳ期古・中段階を中心とする時期。遺跡西北部を中心にSE13，SE25，SE22，SE40，SE29，SE30，SE26，SE04など多数の井戸が掘られ、東南部では，SD10に続いてSD09，SD18が形成される。SD12もすでにあったようで、その南側にはSK09といった土坑のほか、柱穴と考える小坑が見られ、すでに建物の痕跡も認めうる。なお、SE26との切合い関係からみて、SD23はまだ現われていない時期とする。11世紀末から12世紀前半までの状況である。

（2）第2期（12世紀後半～13世紀末，図24・25）

平安京Ⅳ期中段階から新段階にかけて、第1期との画期を認める。すなわちSE26が埋まった後にSD23が掘削され、井戸はその溝の西北に集中する。SD03は、遺物こそ平安京Ⅳ期にまで遡りえないが、この溝はSD23に連続するものであり、同時に開削された遺構とみなしたい。さらにこの時期の中心となる遺構は、新たに現われるSD11とSD13、第1期より存続するSD09である。SD11は東西幅が広く、肩が直線的でないうえに、近辺に小規模な石組がみられたりすることから、単なる溝ではないと思われるが、これが池のような造園的なものであるという確証は得ていない。この遺構の北方は未調査のままであるため、最終的な判断は将来に譲りたい。SD13はSD11に流入する痕跡をとどめ、SD11の南端とSD09との間是不連続であって、SD11で溢水した場合にその水がSD09に流れ込んだらしい。これらの遺構は、中世京都Ⅰ期の中段階にはほぼ埋まったようで、その時点までを第2期の前半とする（図24）。この時期の遺構としては、他にSD01，SD02，SE07，SE08，SE09，SE12，SE14，SE16，SE17，SE18，SE19，SE24などが併行する。このように、本遺跡のうちで、遺構の形成が最も盛んでかつ最も西寄りにまで、生活痕をとどめるのがこの時期である。ただし、SD03とSD09とはともに方位を2°～3°西へ振る溝で、両者のあいだに、この時期の顕著な遺構がない。第1次調査直後の

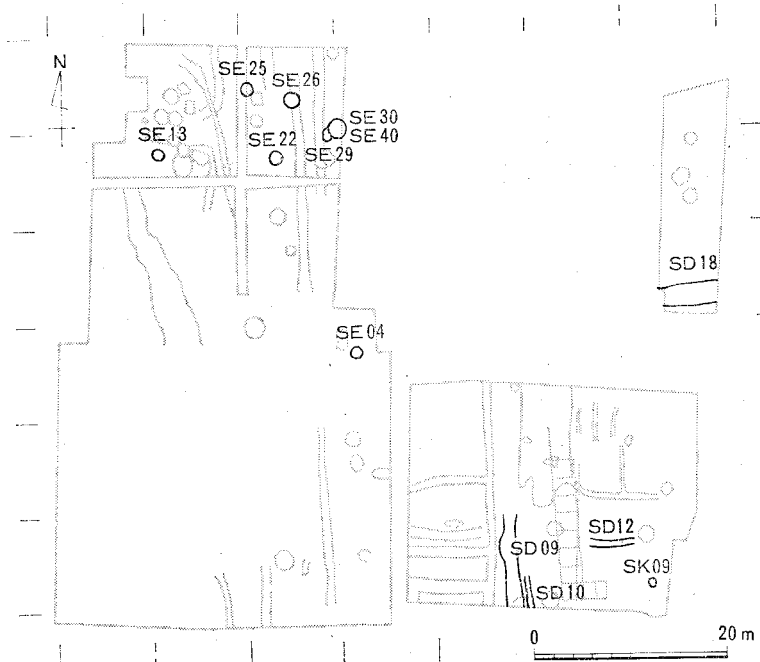


図23 第1期の遺構配置図

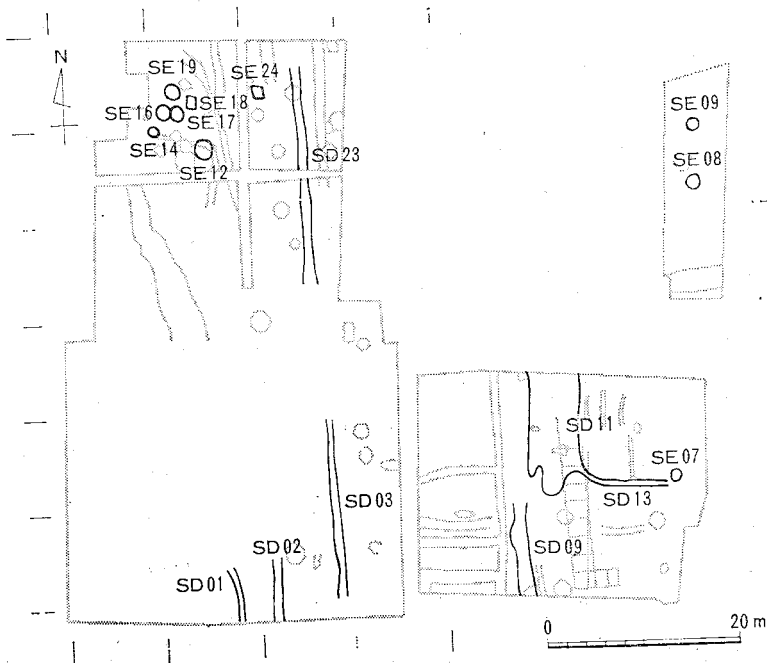


図24 第2期前半の遺構配置図

時点では、SD03とSD02とを対にして、このSD03を道路の東側に沿う側溝と考えようとしたが〔京大調査会77〕、この溝の東側SD09までのあいだも、これと併行する時期の遺構はまったく希薄であり、そのあいだを道路敷と考えることも可能である。しかし、その場合、道幅は大路なみとなり、問題が残る。いずれにせよ、路面自体を検出していないので、現時点では判定し難い。

SD09、SD11が埋まり、SD03はかろうじて存続していた時期を第2期の後半とする(図25)。一時的に遺構の密度が希薄になり、不定形の特異な平面を有する溝SD06が現われるほかSK02、SK07など、土器の投棄坑かと考えられる土坑が若干存在する。また、第1期から続く西北部の井戸群は、まだ存続している。

結局、第2期は、平安京Ⅳ期中段階ごろから中世京都Ⅰ期古段階を中心とし、12世紀後半から13世紀末までということになる。

(3) 第3期(14世紀、図26)

溝SD08とこれに接続する溝SD04、SD05、SD07、井戸SE03がおもな遺構で、後半には大量の土師器を投棄した土坑SK08、SK10のほか、回廊状の建物SB01が現われる。SD08は、前時期のSD09やSD03に代わる南北方向に長く続く溝であるが、この第3期の中では比較的早い段階で埋没したものであるらしい。またこの溝は直角に折れてSD05とひと続きの遺構となっており、その西延長上に石組SX02がある。性格はよくわからないが、SD05の端部を形成する石組かもしれない。

一方、SD04は東端でSD08を介し、北のSD05東端に接続するが、その位置で溝底面に段を生じており、同一時期の掘削とは考え難い。SD04出土の遺物は、年代にも幅があるようで、こちらを時期の降る遺構とみている。このSD04は両端で南へ折れ曲がるようで、しかもその内側に、SK04など、柱穴を思わせるような小坑が、不規則ながら存在し、この溝が建物に伴うものである可能性を残す。

唯一の建物遺構SB01は、層位のうえからこの時期も後半のものと考えうるが、时期的にも性格に関しても決定的な資料に乏しい。ただ、この北端のすぐ西側でこれよりやや下位より検出した小坑に、青銅製の火舎香炉と六器が埋められており、SB01も宗教建築の遺構であった可能性がある。

以上の第3期の遺構は14世紀の前・中葉に形成されたと考えうる。

(4) 第4期(15世紀、図26)

14世紀後葉、中世京都Ⅱ期新段階をもって、本調査区の平安時代以降形成された遺構群

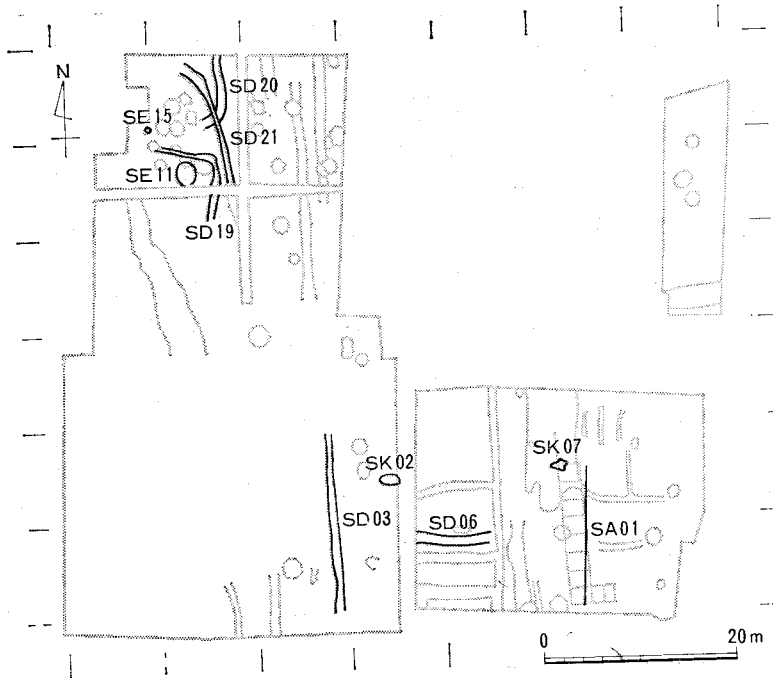


図25 第2期後半の遺構配置図

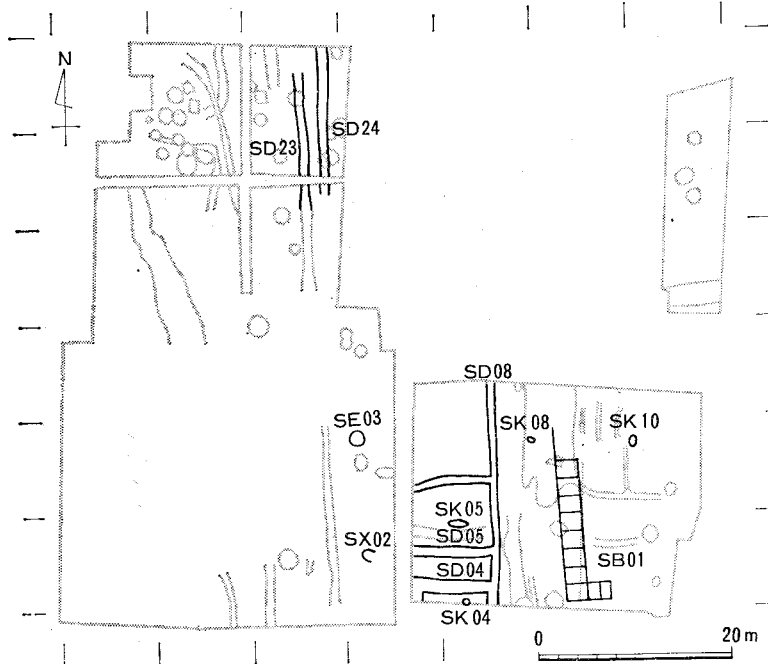


図26 第3・4期の遺構配置図

はほぼ終末を迎える。かなり大がかりな整地によって耕地化が進むのがそのころなのであろう。ただし、15世紀後葉の中世京都Ⅲ期新段階で、遺跡西北部に南北方向の溝SD24が現われ、同時期に、SD23が掘りなおされた形跡がある。同じ遺構面に、柱穴らしい小坑を多数検出している。溝中からは、羽釜、鍋類が多数出土していることから、ごく近くに住宅建築の存在を想定しうる。SD24は方位を真南北方向にとっており、医学部構内発見の遺構群〔京大埋文研79〕と関連があると考えられる。いずれにしろ、第3期までの遺構群との直接的関連性はほとんどないとみなしてよく、短期間で廃棄されたものらしい。

(5) 第5期(19世紀, 図7)

第4期の遺構群が埋没した上層には、厚く耕作土が堆積し、この地は、近代を迎えるまで長く耕地であったことをうかがわせる。ただ、耕作に伴う遺構としては、古い時期のものがなく、近世も終末段階のころの遺構に限られる。これが第5期の遺構群である。井戸と野壺のほかに溝SD26および少なくとも69列を数える柵とラチス状遺構と呼んでいる規則的に並ぶ矩形の浅い土坑群があり、これらの組合せ関係を検討することによって、当時の地割や地籍境界をある程度まで推定することができ、第2章第2節でその境が道路

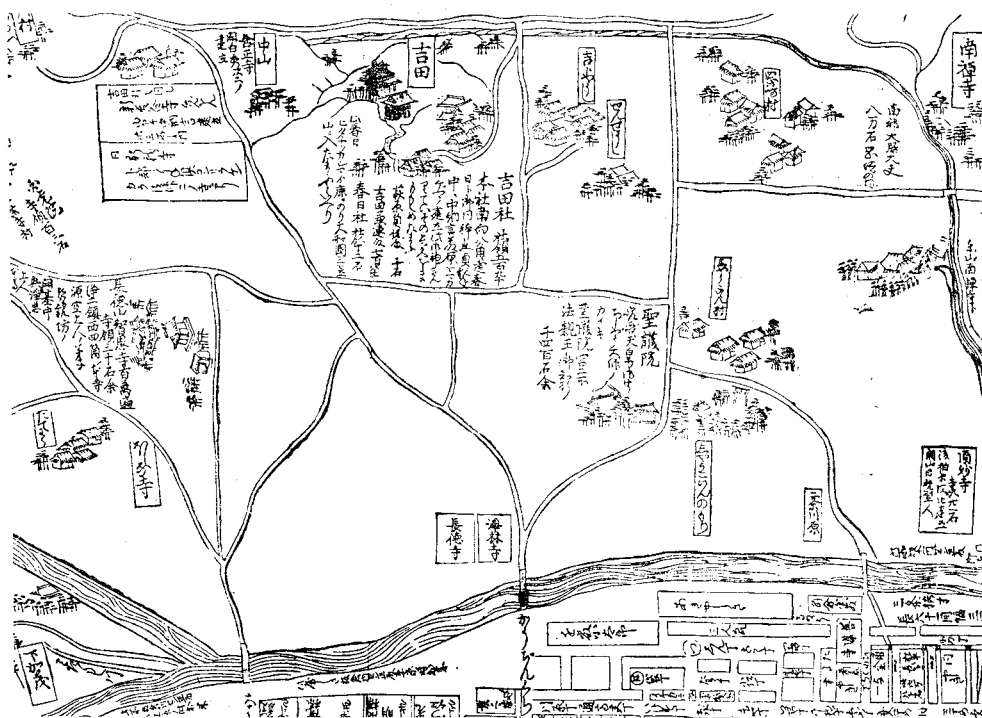


図27 『新撰増補京大会図』(元禄4年)にみる調査区周辺

であった可能性を指摘した。明治20年測図の地図(図1)や、慶応年間の京絵図にこの道はみえないが、元禄4(1691)年刊行の京大絵図(図27)や、鴨東を鳥瞰した宝暦年間(1751~64年)の『花洛名勝図会東山之部』には、荒神口の東から熊野神社の北に出て黒谷に至る道が描かれており、今回推定している道筋が、事実存在していたことを裏づける。

ここで、この道が、下層の溝SD03に被い重なっていることに気づく。溝SD03は、溝SD23に連なり、平安末期に、街路に併行して設けられたと考えている溝である。この溝はまた、第4期すなわち室町後期のある時点で再度掘られた形跡も認めている。この溝は地籍境界として、この地の土地利用を規定したものと考えられるが、境界として近世に至っても影響を与えており、上記の重なり合いは、その結果によるものであろう。

2 遺構の変遷と白河北殿北辺の展開

本遺跡において、以上のように遺構の構成の変遷をとらえたが、それぞれの時期における遺構のまとまりや、その変遷過程のうえに確認できたいくつかの画期を、歴史上どのように理解すべきか、つまりそれぞれの時期における歴史的事象と対応させつつとらえなおすことができないかということについて、ここで推考してみようと思う(表21)。

まず、当地を含む、鴨川の東で神楽岡(吉田山)の西南麓一帯が、どのようにして開かれていったかを考える。平安京が造営される以前、鴨東地域がある程度開かれた土地であったことは、北白川廃寺や八坂法観寺跡などから明らかであり、最近では、神楽岡西麓の京都大学本部構内でも奈良時代の住居跡が発見されている。さらに遡れば、京都大学北部構内、同教養部構内、岡崎遺跡など、神楽岡周辺には縄文・弥生時代遺跡が多数分布していることから、この地が早くから人々の居住するところとなっていたことが知られる。平安京が造営されてまもなく、神楽岡の周辺は、皇族や藤原氏の別業や墓所が営まれる地となり、また、山門・寺門の子院群が東山沿いに進出していた。10世紀ごろの景観を推定してみると、岡の北には、栗田寺・円覚寺・天神社、岡の東には浄土寺・如意寺・円成寺・禅林寺のほか、より岡に近い側には延喜式に載せる白河陵・愛宕墓・後愛宕墓など藤原良房にゆかりの陵墓があり、岡の南には東光寺や摂関家の別業白河殿(白河院)が営まれていた[岡田80]。そして、比叡山と如意ヶ嶽の山間に源をもつ白川の流れが、岡の東から南へというほぼ現在の流路のほかに、岡の北側にもいく筋かの分流をなしていた[藤岡78]。岡の西方では、そのころ高野川あるいはその支流がまだ広い河原を形成して、本調査区付近まで流路が及んでおり、そこに注ぐ白川の分流とともに、時にはよどみ、あるいは氾濫していたらしい。寛和2(986)年に朝廷のまつところとなって二季祭が始まった吉田社は、

この河原からほど近い岡の西麓に座していたが、調査区あたりは、居住地としての条件はまだ整わなかったようである。

神楽岡西麓のこうした土地柄に改良の手が加わった痕跡と考えるのが、護岸のある川 S X06 である。砂礫の面に貼られた粘土の中や、すぐ西側の砂礫中より出土する土器が示す年代は、10 世紀末を降らない。この護岸をまもなく埋めるのは高野川系の砂礫で、かつその流れは南南東に向いていたことがわかっている。その後の過程で、さらにどの程度人為的な作業が伴ったのか、また白川による砂礫の堆積がどのように作用したのか明らかではないが、後述する白河泉殿の造立からみて、11 世紀の終りごろには、流れは西方へ押しやられてほぼ安定し、その後背湿地が、池泉として有効に利用しながら開発されていったと考えることができる。⁽⁹⁾ 小河川 S X07 も、生活用水に利用される程度の痕跡的な流れであった。

承暦 1 (1077) 年、二条大路末に法勝寺が供養される。白河天皇はこの寺の法事に伴って、寛治 7 (1093) 年ごろ、前大僧正覚円の坊舎を御所と定めた。これは水石風雅な御所であったことから「泉殿」と呼ばれた。その占地を法勝寺西面から 5 町ぶんおよそ 600m ほど離れて、南は二条末から北は大炊御門末までとする推定[杉山 62]が有力で、おそらく後背湿地の開発がその立地を可能にしたと考える。12 世紀代になって、尊勝寺(1103 年)、蓮華蔵院(1114 年)、最勝寺(1118 年)と、御願寺や仏堂の供養があいつぎ、熊野社の創始もそのころと伝えられる。鴨川の東、白河と呼ばれた土地が、しだいに都市化の様相をみせはじめていたとみることができる。最勝寺が供養される直前の同じ 1118 年、白河法皇は泉殿の北隣、大炊御門大路末をはさんで新しい御所を設けた。これが「白河北殿」である。大治 3 (1128) 年には円勝寺の供養もあり、翌年には北殿が改造拡張される。御所の新造、改造の直接の契機が何か、明らかではないが、あいつぐ院や女院の御願寺の造立によって、白河における院の御所の利用頻度はますます高まっていたことであろう。白河北殿の位置に関して、大炊御門末をはさんで泉殿とほぼ併立していたことを除いては、『保元物語』以外に依る史料があまりない。それによれば、北の門は大炊御門末の 1 町北春日小路末に面している。ただ、『愚管抄』中の「白河ノ中御門河原ニテ千駄ノ阿弥陀堂ノ御所トキコニルサシキ殿ト云御所ヘワタラセ給エケリ」との記述や、大治 4 年の改造記事から北を中御門末までとする可能性が指摘され、杉山信三は北殿を 2 町四方とする推定図を提示しているが、積極的にこの案をとることはできない。⁽¹⁰⁾ 北殿の東西を限る史料となるとさらに乏しい。『保元物語』は、西は河原に面していたことを示唆するが、同時に「院の御所の西、

藤中納言家成卿の宿所に云々」とも載せる。いずれにしる南殿の北という地点からずれず、河原にほど近いところであったという推定にとどめざるをえない。

この北殿に関して、その敷地内にどのような建物が配置されていたか知りえないが、南殿を蓮華蔵院という九輪阿弥陀堂と一体となった御所ととらえるのとは少々趣きを異にする。ただ、北殿より西で冷泉末と春日末との間に、長承1(1132)年造立の阿弥陀堂宝莊殿院を置くという杉山の考証があり、『保元物語』では北殿、宝莊殿院ともに西を河原に面しているごとく記述されており、南殿と蓮華蔵院との関係と同様、保元当時には、宝莊殿院の敷地を北殿と一体のものとしてとらえることがあった可能性も否定できない。さらに北殿の東隣には、長承1(1134)年に院の別当藤原顕頼が「白河北殿東御所」なるものを造進し、これが康治1(1142)年に御堂として供養され、のち仁平1(1151)年にはその池の中島に多宝塔が造立されている。この間、北殿およびその近辺の市街地の動向にかなりあわたたしいものがあったことは、史料中の火災の記事からも伺い知れる。天養1(1144)年5月には北殿自体が焼亡するが、同年10月にはただちに再興されており、北殿がそれだけ緊要な御所であったことが察せられる。久安4(1148)年には北殿北辺に火事があり、顕頼の宿所ほか焼亡した。この火災でも復旧は速やかであったに違いない。

そして保元1(1156)年、保元の乱を迎える。この乱は、以後の政治史を大きく方向づけたという点で重大な出来事であったには違いないが、乱というにはあまりに短期間であり、戦場は北殿近辺に限られ、決して白河一帯が戦火にさらされたというものではなかったようだ。北殿と前斎院(統子内親王)御所が焼亡したというが、宝莊殿院は罹災からまぬがれたのか、少なくとも承久3(1221)年に火災を被るまで堂舎は存続していた。とはいえ、乱の前後において、市街地の営みの活発さには、史料に現われる限り、その差は歴然としている。乱後、北殿はもはや再興されることなく、跡地には平治1(1159)年に千輪阿弥陀堂が清盛によって造進され、元暦1(1184)年には栗田宮崇徳院廟が創始されるものの、史料にみる白河の地に関する記事はめっきり減り、しかも各種罹災記事はあっても、再建・復興の様子はまれになってしまう(表13・21)。

本調査区の第1期と第2期の遺構群は、白河における街区の形成と保元の乱後の衰退の過程としてとらえることができよう。しかし、その画期をちょうど乱をもってあてることが妥当かどうか検討を要する。遺跡は、土師器の時期区分による平安京Ⅳ期中段階ごろから中世京都Ⅰ期古段階すなわち12世紀後半から13世紀前葉にかけて、北へ拡大しており、保元の乱直後に多くの遺構が廃絶した状況ではない。ここで乱が白河の街区に対して、決

表21 調査区周辺に関する文献記事(1)

年 代	事 項
1072 延久 4	白河天皇即位
1075 承保 2	法勝寺事始〔法勝寺金堂造営記〕
1076 3	法勝寺阿弥陀堂木作始〔法勝寺阿弥陀堂造立日時定記〕
1077 承暦 1	法勝寺金堂・講堂ほか供養〔承暦元年法勝寺供養記〕
1083 永保 3	法勝寺塔・薬師堂など供養〔朝野群載〕
1084 応徳 1	増誉白河房(聖護院)〔後二条師通記〕
1085 2	法勝寺常行堂供養〔水左記〕
1087 寛治 1	白河法皇による院政開始、堀河天皇即位
1093 7	法勝寺常行堂御所〔中右記〕
1095 嘉保 2	覚円坊を法勝寺御所とする(白河泉殿)〔中右記〕
1102 康和 4	尊勝寺金堂など供養(堀河御願)
1103 5	増誉僧正熊野社創始
1105 長治 2	尊勝寺阿弥陀堂など供養
1107 嘉承 2	鳥羽天皇即位
1109 天仁 2	法勝寺曼陀羅堂供養〔百鍊抄〕
1114 永久 2	白河泉殿内に阿弥陀堂供養(蓮華藏院)〔白川御堂供養記〕
1115 3	白河泉殿改造〔殿暦〕
1117 5	白河御塔(のち最勝寺)供養
1118 元永 1	最勝寺金堂、薬師堂供養(鳥羽御願)。白河北殿造営〔中右記〕
1122 保安 3	法勝寺小塔院供養
1123 4	法勝寺の北に白川新御堂建立。崇徳天皇即位
1125 天治 2	円勝寺事始
1126 大治 1	円勝寺三重塔供養
1127 2	円勝寺五重塔、三重塔供養。法勝寺西大路神楽岡へ延長
1128 3	円勝寺供養(待賢門院御願)
1129 4	白河北殿改造。鳥羽院政。最勝寺五大堂供養。証菩提院供養(篤子御願)。 白河天皇没
1130 5	最勝寺五大堂再興。蓮華藏院に新阿弥陀堂と塔供養
1132 長承 1	宝莊殿院供養。得長寿院供養
1134 3	白河北殿東御所造営〔百鍊抄〕
1139 保延 5	成勝寺供養(崇徳御願)
1140 6	法勝寺九重塔修理〔百鍊抄〕
1141 永治 1	近衛天皇即位。歆喜光院供養(美福門院御願)
1142 康治 1	白河東小御堂供養〔本朝世紀〕
1143 2	金剛勝院・押小路殿造営(美福門院御願)
1144 天養 1	白河北殿焼亡、直ちに再興
1145 久安 1	二条十一面堂
1146 2	延勝寺事始
1148 久安 4	白川北殿北辺の御所預東市正正経宅、故民部卿顯頼宿所并小屋が焼亡 〔本朝世紀〕
1149 5	延勝寺金堂・塔など供養(近衛御願)。得長寿院修理

調査区周辺に関する文献記事(2)

年	代	事	項
1151	仁平 1	東御所に宝塔〔本朝世紀〕。福勝院供養（高陽院御願）	
1154	久寿 1	福勝院三重塔供養〔兵範記〕	
1155	2	後白河天皇即位	
1156	保元 1	保元の乱。北殿，斎院御所焼亡	
1158	3	二条天皇即位。後白河院政	
1159	平治 1	平清盛，千鉢阿弥陀堂を造進〔百鍊抄〕。平治の乱	
1163	長寛 1	延勝寺阿弥陀堂供養〔本朝世紀〕	
1164	2	成勝寺阿弥陀堂供養	
1165	永万 1	六条天皇即位	
1167	仁安 2	法勝寺不動堂供養〔百鍊抄〕	
1168	3	高倉天皇即位	
1169	嘉応 1	法勝寺九重塔落雷	
1174	承安 4	法勝寺九重塔落雷。尊勝寺僧房火災	
1176	安元 1	法勝寺九重塔落雷	
1178	治承 2	法勝寺九重塔大風で破損〔平家物語〕	
1180	4	安徳天皇即位。福原遷都	
1184	元暦 1	粟田宮創始〔吉記〕	
1185	文治 1	大地震，法勝寺法華堂を除き顛倒〔吉記〕。得長寿院，宝荘敝院回廊など顛倒	
1191	建久 2	後白河法皇没	
1208	承元 2	法勝寺九重塔雷火で焼失	
1213	建保 1	法勝寺九重塔再建	
1214	2	尊勝寺南大門，風により顛倒	
1219	承久 1	尊勝寺西塔焼失〔百鍊抄〕。最勝寺塔焼亡	
1221	3	承久の乱。六波羅探題設置。宝荘敝院焼亡〔百鍊抄〕	
1227	安貞 1	尊勝寺金堂顛倒〔百鍊抄〕。歆喜光院破壊〔明月記〕	
1231	寛喜 3	尊勝寺東塔炎上〔明月記〕	
1232	貞永 1	法勝寺円堂，群盗により破壊〔明月記〕	
1237	嘉禎 3	粟田宮東方へ遷座	
1247	宝治 1	延勝寺阿弥陀堂焼失〔葉黄記〕	
1256	康元 1	粟田宮焼失，再建。崇徳院御影堂の初見	
1261	弘長 1	粟田宮損壊	
1267	文永 4	尊勝寺再建の儀	
1320	元享 1	歆喜光院再興	
1330	元弘 1	元弘の乱	
1334	建武 1	粟田宮焼亡	
1336	延元 1	神楽岡城の合戦	
1342	暦応 5	法勝寺金堂など火災。再建の儀	
1384	永徳 4	吉田社に神領寄進〔將軍義満寄進状〕	
1396	応永 3	熊野神社境内管領を聖護院に命じる	

定的な破壊をもたらすことがなく、その主戦場が本遺跡地まで及んでいなかったことを考慮する必要がある。ある程度被害が及んでいたかもしれないが、当初は、それまでの災害の経験と変わらず、しばらくは復興の動きを示していたとしても不思議はない。むしろ、白河千駄阿弥陀堂の造営や栗田宮の創始は、街区再編を促したと想像しうる。第2期の端緒と考えている溝SD03、SD23に沿って推定できる街路の設置も、そうした動きの中でとらえてよいのであろう。

瓦の出土状況についてみると、第1期の遺構に伴伴する軒瓦類と、第2期前半に属するものがある。ただし、建物に係する遺構に伴うものはなく、瓦葺の堂宇が本調査区内に存在していたということにはならない。軒瓦は本調査区では南へいくほど多く出土をみることから、瓦葺の堂宇は本調査区の南方にあったと推測できる(P59表3)。北殿焼亡以前においては、長承1(1132)年造立の宝莊嚴院、康治1(1142)年供養の北殿東小御堂やその中の多宝塔があり、ほかには北殿の築地塀も瓦で葺かれていたと考えてもよいであろう。また、北殿の北辺にあり久安4(1148)年に焼亡した記事のある、東小御堂を寄進した藤原頼頼の宿舎にも瓦が葺かれていた可能性も考慮する必要がある。他方、北殿焼亡以後は、宝莊嚴院のみが承久3(1221)年まで残るものの、北殿の跡地には千駄阿弥陀堂が清盛によって造進される。退転の経緯は明らかではないが、供養されたのは平治1(1159)年のことである。

さらに降って元暦1(1184)年に栗田社が創始される。創建当初、もと崇徳院が所持していた鏡を神体とし、同じく普賢像も合せて祀られたというが、この社殿とは別に崇徳院御影堂が建てられ、康元1(1256)年には青蓮院門主が検校に補せられたという〔西田30〕。おそらくその時までには御影堂が存在していたのである。その宮の位置について、『吉記』は「以春日河原為其所、保元合戦之時、彼御所跡也」とし、『源平盛衰記』には「春日ガ末ノ北、河原ノ東也、此所ハ大炊殿ノ跡先年ノ戦場也」とあり、いずれも北殿のあった場所をさしている。しかしその場所では鴨川の氾濫の危険があったため、嘉禎3(1237)年東方へ宮を遷したことが『百練抄』にみえる。もともと北殿の跡地であったとすれば、常に洪水の危機にさらされていたとも考えられず、また北殿跡には、すでに千駄阿弥陀堂がその地点を占めていた点からも、宮はかなり河原寄りに創建され、千駄阿弥陀堂がはやくに廃絶した跡に遷されたと考えてはどうであろう。『山城名勝志』は崇徳院御影堂の旧地を「在⁽³⁾鴨川東聖護院森西北車道南也」と伝えて、現京都大学病院構内の南あたりに比定している。福山敏男は、諸記録から嘉禎の移転後の位置を丸太町通新道南側付近と推定し、

創立当時は移転地の西1町～2町ほどの地点とした〔福山77〕。

以上のように、第1期と第2期の遺構群とは共通する時代背景をもち、両期の主要遺構の方位が 2° ～ 3° 西へ振ることも共通している。その方位は、推定最勝寺北築地跡や、推定尊勝寺南大門跡の方位と同じであり、はずれに近いとはいえ、白河の地に新しく形成された街区の中の遺構としてとらえることができる〔岡田79〕。結局、院の御所が焼亡したのちも、鴨東白河の市街を維持する基盤は、遺跡のうえでみるかぎり、ただちに大きく崩れるということとはなかったといえよう。しかしそれも長くは持続せず、遺構の変遷における第2期後半の状況によれば、13世紀中葉以後は極度の衰微期に至ったとみることができる。

つづく14世紀にはいり、鎌倉幕府に両統迭立の議がおこり、やがて足利氏が再び京都に政権をうちたてて南北朝時代が始まる。この頃、にわかに活気を取り戻すかのように本遺跡には再び多くの遺物・遺構が集中する。第3期の遺構群である。第2期までの遺構にくらべると、溝SD05・SD08とこれにつらなる溝SD04など、その方位はずっと真北に近くなっており、井戸もSE03ただ1基のみ検出されたにとどまり、白河の街区にくみこまれたかつての遺構群と様相を異にする。ただ、第2期の溝SD03・SD23に沿って想定した街路が、道の存続はともかく、地割のうえで溝SD08を制約しているように思われる。

14世紀も末のこととして、熊野社境内が南は大炊御門末、北は近衛末に及んでいたことはすでに触れた(第1章第2節)。ただし「崇徳院、大吉祥院敷地」を除くことが同じ史料中にあり、栗田宮が存続していたことが知られる⁽⁴⁾。栗田宮は嘉禎の東遷ののち、康元1(1256)年と建武1(1334)年の少なくとも2度の火災を受けながらも、再三にわたって復され、応仁1(1467)年の乱による焼亡まで衰えなかったという〔西田30〕。この熊野社境内は久寿2(1155)年には福勝院を含んで近衛の北まで及んでいた⁽⁵⁾のであるから、200年余を経て、その北限が南へ押しやられたことになる。それに対して、『京都坊目誌』が伝える永徳4(1384)年の吉田社の社領は、南を近衛末で限っており、当時近衛末が両社境内を境する形になっていた。12世紀末から14世紀にかけて、福勝院や栗田宮のほかに、鴨川の東で神楽岡までの間には、源頼政の宿所や勧修寺家流吉田家の第宅・菩提所などが史料のうえから知られているが、それらが退転してゆく一方で、14世紀を通じてこの一帯は吉田社と熊野社を軸として再編されつつあったとみなすことができる。遺跡の密度の点でもこの時期には、京都大学構内では医学部構内の方が病院構内をしのぐようになり、吉田近衛町においても大量に同時期の土器を出土する遺跡が報告されている〔京都府教委78〕。

第3期の遺構群については、こうした時代背景をとらえることはできても、それ以上に

具体的な解釈を及ぼすことはできないのが現状である。この時期以降、当地は田畑化が進んだものと考えており、第4期の遺構といっても溝SD24とその周辺の小坑群が一隅にみられる程度で、それも15世紀後葉の短時日のことである。この時期の遺跡の中心はもっと北ないし東寄りに想定するほかない。院政期の白河の中心を占めていた南の六勝寺付近は、応仁の乱がその衰亡を決定的にして、荒地または田畑化が進行したようであるが、本調査区付近では、それよりはやくに市街地は消滅したとみなすのが妥当であろう。

第5期の遺構はもっぱら耕作にともなう遺構で、京都大学の施設が現われる明治30年代までの景観を想起させる。近世後半には熊野神社門前に家並が現われ、北には吉田社も庶民信仰の間に根をおろし、京都らしい景観がみられたことであろう。そこで、洛中から鴨東にわたる道筋がどうなっていたかを考えると、前に述べた荒神橋付近から本調査区の南へ通じる道に思いあたる。荒神口はその名のとおおり、近世はじめより洛中から鴨東に通じる要所であった。そこから北東へ白川道となり、その途中から吉田社の参道が東へのび、また北へ別れて修学院方面に通じた。元禄4(1691)年版の京大絵図をみると、三条より北で鴨川にかかる橋としては、二条橋と今出川橋との間は荒神橋のみである。当時熊野神社へ至るにはその東詰から南下するか二条河原から北上する以外に道はなかった。荒神橋が古くから恒常的な橋であったことは、近江から北国に通じる白川道の重要性から容易に想像しうるが、暦仁1(1238)年に入道兵庫頭重房なる者が「鷹司河原橋」を勧進し、2年後にその供養があったという『百鍊抄』の記載⁶⁾がこの橋の重要さを裏付ける。その頃ならば、おそらく白河北殿北辺に通じていた第2期の南北街路があったはずで、その道は多少ずれたとしても第3期にも存続していた可能性がつよいこと、さらには元禄の絵図にのせる道とも一部重なりあうことはすでに述べたところである。そして宝永2(1705)年の序をもつ『花洛名勝図会東山之部』にも二条橋のすぐ北の橋は荒神口にかかる橋で、それらしい道筋が描かれている。ところがこの宝永頃の図には、その道とは別に、熊野神社からまっすぐ西に延びる道が鴨東につきあたり、そこに鳥居をおいている。門前には家並もみえる。この後まもなく、丸太町通りに鴨川をわたる恒常的な橋が設けられたであろうことは想像にかたくない。そうすれば、荒神橋から熊野神社に至る道の機能はほぼ失われるわけで、幕末頃の図にはこの道がみられなくなることも肯けるのである。

3 遺跡の歴史的性質

前節では、平安時代から近世の初頭に至るまで、遺跡周辺地域の歴史的展開の中で、遺構群の変遷をとらえようと試みた。史料から辿りうる歴史的環境を、できる限り復原し、

また遺構の検討から史料に現われないこの地域の変容過程を明らかにできたと思う。本節ではさらに、本調査区の各期の遺構群それぞれが示すその性質について、まとめることにする。

本調査区で検出した最も古い時期の遺構である護岸のある川 S X06 は、10 世紀頃には高野川系の河川がこの地を流れていたことを示している。したがって、高野川は現在の流路より、300 m ほど東を流れていたことになる。また護岸を埋めている砂礫には加茂川の礫に含まれる輝緑凝灰岩が含まれていないことから、加茂川と高野川の合流点はさらに南であったと考えうる。平安京の造営時に鴨川を現堀川付近から現在の場所に改修したとする説もあるが、今回の調査結果からみると、逆に平安後期の鴨東の開発に伴って高野川が西へ移され、現在の「Y」字形の流路が形成されたと推測できる。本調査区のみならず白河街区の本格的な開発は、この高野川の西遷を前提としてなされているのである。

調査区が本格的に開発されるのは、法勝寺の建立(1077 年供養)を契機とする六勝寺・院の御所の造立と軌を一にする 11 世紀末から 12 世紀前半である。そして白河北殿の創建からその焼亡に至る 1118～1156 年に対応する平安京Ⅳ期古・中段階は遺物が多い時期の一つであり(P75 表 14)、またこの時期に比定しうる瓦は出土瓦のうち約 1/3 をしめている。このことからこの地が白河北殿の北辺として開発され、頻繁に利用されていたと想像できる。この時期の遺構すなわち第 1 期の遺構群は、井戸が集中する西北部と、方位を真北から若干西にふる溝のある東南部とからなり、その配置は遺跡が拡大する第 2 期の遺構群の基本となっている。この時期の遺跡は北へは及んでいず、京都大学医学部構内や教養部構内では、この時期の遺構はごくわずかに検出されるにすぎない。以上のことから、第 1 期の遺構や遺物を残した人々は、白河北殿の造営とかかわり、院政を支えた勢力と予想される。

保元の乱以後、白河北殿は再建されることなく、院の御所は他の地域へと移ったが、本調査区では、遺物量に若干の減少をみるものの、この時期にあたる第 2 期の遺構が多い。とくに本調査区での主要な遺構といえる検出長 56 m の溝 S D03・S D23 と、幅 4.5 m の幅広い溝状遺構になる S D11 は 12 世紀後半に造作されるのである。

この時期の遺構群は主要な遺構が出現するものの、その基本は、井戸が集中する西北部と方位を西に振る溝群のある東南部とからなっている。この構成は第 1 期とほぼ同じであり、遺構群を形成した主体には変化がなかったことを示している。ただし検出長約 56 m の溝の出現など街区の成立を推定させる新たな遺構もある。またこの出現とともに本調査区より北に位置する京都大学医学部構内や教養部構内では 12 世紀後半の瓦がまとまって出土

し、遺構もこの期に増加することから、吉田近衛町に比定される福勝院の建立(1151年)とあわせて、この時期に北側への開発の波及を考える必要がある。すなわち調査区周辺は白河北殿の成立によって開発が盛んとなった地域であるが、白河北殿の焼亡にはあまり影響されず、逆に北側へも開発が波及するといえる。これは平氏・鎌倉政権の成立、承久の変のような政治変動を経ながらも、院政を支えた勢力がこの地では健在であったことを物語っているといえよう。

さてこの時期の遺物では、12世紀後半に比定しうる瓦が本調査区出土瓦総数のうち2/3を占める。ただし13世紀も中葉以後の瓦は出土せず、造営のピークはこの地ではほぼ12世紀に収まるものと考えられる。一方、土器・陶磁器類は13世紀中葉にもピークがあるが、これは主要遺構といえる溝SD11の埋没時の投棄によるものである。この13世紀中葉を境にして遺構と遺物は急激に減少する。

14世紀になると遺構群の構成はがらりと変わる。第3期の遺構群は、方位がほぼ真北に近い遺構群、井戸、やや方位を西に振る建物、土器溜からなる。遺構が東南部に集中するという一点のみ第1・2期の遺構と共通するものの、溝の方位や井戸の位置とその集中度においては、それ以前の遺構群と異なる。また遺物についても同様で、瓦の出土が皆無であって遺構から出土する中国製陶磁器もごくわずかであり、その内容に大きな変化を認める。真北方位の遺構は医学部構内でも検出しており、その地でもほぼ14世紀前葉ごろに東へ振る方位から真北方位へ変わることが判明している〔京大埋文研79〕。この方位の変化に関する文献資料としては、現医学部構内付近に第宅や菩提寺をもつ吉田氏(藤原北家勸修寺家流)の子孫吉田定房が、建武4(1337)年吉田から南朝のあった吉野へと移ったこと(『公卿補任』)、吉田社の若宮が延元1(1336)年に現医学部構内に造立されたこと(『京都坊目誌』)、そして永徳4(1384)年の足利義満寄進状で吉田社の社領の四至が「東は神楽岡、南は近衛末、西は河原、北は土御門末を限りとし、吉田泉殿跡の一部」と定まったこと(『京都坊目誌』)がある。また熊野社の四至についても前述したように、応永3(1396)年には、東は今辻子より西へ、南は大炊御門末、西は河原、北は近衛末であり、すくなくとも14世紀末には神楽岡(吉田山)より西はすべて、吉田社と熊野社の社領に編入されていることがわかる。そして、12世紀末から吉田に居を構えた吉田氏が移転することや、吉田社がそれとあい前後してその地に入ることからみると、すでに14世紀前半には、吉田山から西の地域の再編が開始されたと推定できるであろう。このように考えると、方位の変化を、遺構や遺物を残した人々の変化とすることができ、12世紀当時院政を支えていた勢力が、

この14世紀前半には、この地から追われ、南北朝統一に貢献のあった吉田社、足利家ゆかりの僧が入室する聖護院という新興勢力がとってかわったのであろう。さらにつけ加えるならば、卜部氏が吉田姓を名のりはじめるのも、このころの吉田兼熙からである。

14世紀末ごろ吉田山から西では大規模な整地があったようであるが、本調査区では確認していない。しかし、15世紀以後は、15世紀末の土師器皿と瓦器羽釜とを小量出土した溝やピットを検出したのみで、それ以後、居住に関する遺構がなくなる。遺物も近世後期までほとんどなく、15世紀には本調査区は耕地となったと考えられる。この状況は約2km東北の京都大学北部構内まで一様にみられ、応仁の乱よりも遡る15世紀初頭ごろに、京都大学設立時までの京近郊の農村景観が形成されたと考えうる。

〔注〕

- (1) 13世紀にはいつて営まれた後鳥羽上皇の白河泉殿や西園寺公経の吉田泉殿もこうした池泉を利用したものであろう。前者は押小路末に〔杉山62〕、後者は現今出川通り 付近から一条末あたりに〔川上77〕それぞれ比定されている。
- (2) 『愚管抄』の中の「中御門河原ニテ」とは単純にそこで鴨川を渡ったと考えるべきであろう。
- (3) 車道とは中御門末の道のことであることが『鈴鹿家記』にみえる。
- (4) 大吉祥院とは、久安4(1148)年に建立された、覚宗僧正の白川房に営まれた堂である。その位置は同じ史料によって熊野社近辺であったという以上はわからない〔杉山62〕。
- (5) 『兵範記』同年12月17日の条に、福勝院が近衛末にその南西門をひらいていたことがみえ、かつこの院が「今熊野領已四至内也」とある。
- (6) 『百鍊抄』仁治1(1240)年2月11日の条。